

卓越大学院プログラム現地視察報告書(令和4年度)

卓越大学院プログラム委員会

機 関 名	長崎大学	整 理 番 号	1814
プログラム名称	世界を動かすグローバルヘルス人材育成プログラム		
プログラム責任者	北 潔	プログラムコーディネーター	有吉紅也
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本プログラムは、ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院（LSHTM）との連携のもとに、博士前期では多様なモジュールから成る「グローバルヘルス卓越コースワーク」、後期では「チーム型研究指導」および第三者審査委員によるQEを核とした教育を展開している。応募倍率が高く海外からも多くの入学者がおり、学生による国際学術論文数や国際学会発表数などのアウトプット評価指標においても目標値を大幅に上回っていることなどからも、すぐれた人材育成が行われていることがうかがわれる。 ・Joint Degree コース学生と Non-Joint Degree コース学生との分断の縮小、QEの結果に基づく履修生入れ替え制の緩和、学生間の共同的参画機会の拡充、サテライトオフィスも活用したりカレント教育の拡大、広報の充実など、いっそうの改善に向けての取り組みも継続的になされている。 <p style="text-align: center;">【大学院教育全体の改革への取組状況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長崎大学では2022年度から、博士（公衆衛生学）を授与する「プラネタリーヘルス学環」を創設し、本プログラムのシステムを活用する形で全7研究科に横串を入れる試みを開始している。 <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現地視察においてヒアリングを実施した学生の多くは、本プログラムを有益なものとして捉えていた。例えば、国内外の様々なエキスパートからの意見が聞けたこと、視野が広がったこと、キャリア形成に役立っていること、経済的なサポートや研究費がもらえることなどである。ただ、コロナ禍ということもあり face to face での指導を受けられないこと、留学やインターンシップの機会が制限されてしまっていることや、学生同士の交流も少ないことは、今後改善が望まれる。 ・ただし、今年度の現地視察における学生ヒアリング対象者は全員が博士後期課程に在学しており、また全員が本プログラム以外で前期課程を経験後に後期から入学していた。さらに日本人学生はすべて社会人経験を有し、多くが在職中で、遠隔履修者も複数含まれていた。こうした学生にとって、本プログラム前期課程のコースワークの恩恵の実感は薄く、「チーム型研究指導」による各人の研究テーマ追究が主たる活動になっており、経済的支援以外に本プログラムへの帰属意識や付加価値の感覚は高くない。これがヒアリング対象者の偏りによるものか否かは判別ができないが、ヒアリング対象学生選定の適切性も含め、フォローアップを強化することが望ましい。 ・また全体として、LSHTM の研究者の水準の高さに大きく依存したプログラムであり、教育システムも LSHTM を模倣・踏襲したものとなっている。これは本プログラムの採択時から懸念されていた点であるが、開始して数年を経た時点でも継続している。長崎大学も努力はしているがまだ LSHTM のレベルまでには到達しておらず、今後とも教育レベルの向上が望まれる。 			

- ・「プラネタリーヘルス学環」を軸に大学全体の大学院システムを進められるとのことであるが、一方で、対象となる全7研究科に本プログラムのシステムを活用することが容易ではないことも説明いただいた。この「プラネタリーヘルス学環」と本プログラムの関係についても、さらなる明確化が期待される。